

こんにちは、囑託員の鈴木です。とうとう今日から師走ですね。

先日、職場での会話がきっかけで、明治26年(1893)に発表された幸田露伴の『突貫紀行』を読んでみたところ、なかなか面白かったので、ちょっとご紹介したいと思います。

多くのかたは、幸田露伴に「ザ・明治の文豪」という重厚なイメージをお持ちではないでしょうか。しかし、この作品は悩み多き満20歳の露伴の旅日記なのです。そして、この旅日記の中には露伴が道中で目にした明治中期の東北地方の様子が記されています。

元号が明治に変わる前年の慶応3年(1867)、江戸下谷に下級武士の子として生まれた露伴は、16歳のとき給費生として工部省(のちに通信省)の修技学校に入学し電信技術を学びました。卒業後は電信技手として北海道の余市に赴任しましたが、給費生の義務であった3年間の地方勤務を1年残し、仕事を放棄して出奔してしまいます。それは、「突貫」して今の逆境から何とか抜け出したいとの思いからでした。出奔の理由ははっきりとは書いてありませんが、冒頭で病・愁・悪因縁や目の痛い刺激物に悩まされ、将来も見えず、欲はあっても銭がなく、望があっても縁遠い、と嘆いています。

明治20年8月25日に余市を出奔した露伴は、9月11日午前7時に函館から船で青森に着き、田中某を訪ねます。この頃、まだ青函連絡船は就航していませんが、明治18年に設立された日本郵船株式会社が青函航路を1日1往復運行していました。乗客は港に入った蒸気船からはしけ船に乘換え、正覚寺から北に直進した場所にあった浜町棧橋に上陸しました。



浜町棧橋周辺
(「青森実地明細絵図」明治25年)

その日は青森に一泊し、田中某に酒を御馳走になった後、懐中の心細いまま陸路で東京の実家を目指し歩き出します。これは函館・横浜間の船賃が高かったためと、陸路に行くことで見聞を広め経験を積もうと考えての事でした。

青森の町では安方の町名に謡曲「善知鳥」の話を連想し、また浄瑠璃の外ヶ浜南兵衛を思い出します。そして、海沿いに浅虫を目指しましたので、おそらく現在の合浦公園のあたりも通ったのではないかと思います。その当時の合浦公園は創設者の水原衛作が亡くなり、事業を引き継いだ弟の柿崎巳十郎が建設を進めていた頃でした。



善知鳥神社境内にある「謡曲善知鳥旧跡地」の碑

先を急ぐ露伴は、温泉には入らずに浅虫を通過します。海の中に「ついたて」のような巖があると書いているのは裸島のことでしょう。途中、帽子をなくすも買う余裕もなく、洋服姿に手拭でほっかむりして歩き、ひどく犬に吼えられます。

その日は小湊（現平内町）に一泊し、附近で麻の収穫をしている若い女性にお歯黒をしている者が多いのを珍しがっています。『新青森市史』民俗編によれば、青森では昭和初期頃までお歯黒をする女性があったそうです。

さて、このあたりまで露伴の旅は比較的順調でしたが、次第に苦しいものになっていきます。この続きはまた次回に！